

2024 年度一橋大学大学院国際・公共政策教育部教育課程連携協議会議事要旨

日 時：2025 年 3 月 12 日（水）15:30-16:30 オンラインにて開催

出席者

（委 員）※敬称略

高見 博（世界銀行東京事務所 駐日特別代表）

黒澤 重徳（国立市生活環境部 生活環境部長 兼 防災安全担当部長）

吉崎 達彦（株式会社双日研究所 チーフエコノミスト）

山重 慎二（一橋大学国際・公共政策教育部 院長・教授）

田中 良弘（一橋大学国際・公共政策教育部 副院長・教授）

井伊 雅子（一橋大学国際・公共政策教育部 教授）

青野 利彦（一橋大学国際・公共政策教育部 教授）

（委員外参加教員）

竹内 幹（一橋大学国際・公共政策教育部 准教授）

（参加学生）

Y.J.（公共法政プログラム 2 年）

A.M.（グローバルガバナンスプログラム 1 年）

Y.Y.（公共経済プログラム 2 年）

S.R.（アジア公共政策プログラム 2 年）

■冒頭

（山重先生）IPP は来年度で 20 周年を迎える。人口減少・AI の登場で産業構造が大きく変化している中で、これからの 10-20 年を見据え IPP が変わっていくにあたり、この産業構造の変化に対応していく教育を行っていくかどうか、問題意識を持っている。またオンライン学習の充実により、IPP のような対面教育の存在意義はどこにあるのかを考えていく必要がある。政策にかかわる職場でどのような人材が求められるのか、今後の 20 年の IPP 教育に関する示唆をいただきたい。

■議事内容

（1）IPP の現状と今後のあり方

・社会人学生との意見交換

（2）2025 年度の取り組み

・20 周年記念事業について

■IPP の現状と今後のあり方について

・現役社会人もしくは実務経験のある参加学生に IPP での学び、今後あるべき姿について意見を求めた（一人 5 分程度）

（Y.J.）公共ワークショップなどで他省庁や地方自治体に勤務する多様な学生と対面で意見交換できたことがよかった。祝日（月曜）授業が多かったのも、幼い子供を持つ自分としては家族との調整が大変だった。

（A.M.）各業界の構造の概説が多く学べた。また各種フレームワークを活用したグループワークが多いことは、社会人学生は実務で経験しているが学部卒には社会人として必要な能力の涵養に役立つ。社会人（公務員）学生を増やすには、省庁ごとの考え方も異なるが人事院の国内研修制度枠をさらに充実することも必要。ただし場合によっては転勤が多いため進学をあきらめる人も多いのではないかと。

(Y.Y.) 経済学、法学、国際関係のさまざまな分野の学びを得られたが、座学だけでなくプレゼンテーションやグループディスカッションも多く、他プログラムの学生とも議論を深められる少人数だからこその良さがあった。コンサルティング・プロジェクトで先生方や他学生から様々な意見を聞きながらよりよい提案を作り上げていったことは大変よい経験であった。研究論文もかなりきめ細かく先生方のご指導をいただけた。

PE の他社会人学生にも意見を聞いてみたところ、IPP を選んだ理由として社会人の多さを挙げた人もいた。また、入学してみたら思ったよりもはるかに面白く幅広い学びを得られたという人もいて、社会人学生を増やすには、IPP の良さをもっと世に知らしめるため広報の強化が必要だと思う。また千代田夜間開講の MBA のように学生同士の人脈づくりができる場や、同窓会との連携が必要ではないか。

(S.R.) APPP では、おもに政策分析をテーマとする論文を執筆することから、基礎的な経済学や計量経済学などに加え、自分の学びたい専門的な内容の授業もあるほか、論文を英語で執筆するための授業も充実している。そして何より、各国の政策を運営している公務員留学生とのコミュニケーションは APPP のメリット。逆に APPP 留学生からは、日本人と授業内で交流する機会が少ないと言われる。制度上は IPP の他プログラムの科目を履修できるのだが敷居が高く、他プログラムの日本人学生の交流をより促進すべき。

(山重先生) 外部の先生方からのご質問やご意見は。

(吉崎委員) 出向元との関係や評価についてはどうか

(Y.J.) IPP への研修出向は「人事上、有利にも不利にもならない」とだけ聞いている

(A.M.) 退職せずに通いたかったが、防衛省の場合、研修派遣制度上の対象年齢の高さや卒の少なさ、職場の理解の得づらさ、転勤が多い等の障壁があったため退職して進学した。

(Y.Y.) 毎学期報告を求められる。過去の事例では、復職後に研究テーマに関連した部署にすぐには配属されないようだ。

(S.R.) 山崎さんとほとんど同じ状況。学業に集中できる。評価には関係ない。

(吉崎委員) 民間企業でも似た状況はあり、学んだことを活かせる職場に配属にならないことが多いという問題はある。

(高見委員) 人脈づくりや同窓会との連携について、より具体的な策があれば。

(Y.Y.) 千代田夜間の MBA 学生は仕事と勉強が並行しているため、学生同士が現時点での仕事の話ができる状況であり、それが連携のしやすさ、仲の良さにつながっているのではないかと、一方 IPP は官公庁、一般企業、学部卒とバックグラウンドが多様であるが故に、すぐに仕事に直結するような人脈にはならないが、その意味では修了後の同窓会が交流の場として重要なのではないかと。

■2025 年度の取り組みと 20 周年記念事業について

・(山重先生から周年事業の説明) 記念事業ではまず記念冊子を 20 年の記録として作成したい。ウェブサイトも広報強化の一環として更新したい。2026 年 2 月には同窓会と共催で記念パーティーを開催する予定。同窓会との連携強化という点ではニュースレターの定期刊行を考えている。並行して今後の活動資金のための寄付金集めにも 2 年間かけて取り組みたい。また、個人的アイディアではあるが IPP の中に「国際・公共政策大学院・公共政策連携センター」といった組織を作り、産学官連携の支援や同窓会との連携、ニュースレターの刊行や卒業生向けセミナーの開催、社会人向け短期プログラムなどに取り組みたい。

(吉崎委員) 一橋大学の魅力のひとつは「地の利」。国立という地の利の活かし方、魅力の発信方法を学生の皆さんも含めてもっと考えたほうがいい。

(高見委員) 国立の良さは一橋大学の財産。千代田も同様。また同窓会組織はしっかりしているが海外私学のネットワークと比べると人数が少ない。しかし、留学生も含めて考えると特に中国では一橋に思い入れの強い卒業生も多く、そういう意味でも同窓会の活用は重要。

（黒澤委員）公務員の離職が止まらない時代の中、AI が代替機能として職場に入ってくる。IPP がそれに対して問題意識を持つことは必要。またお金の問題については、学費値上げも検討してはどうか。

■その他質疑

（井伊先生）APPP と他プログラムとの壁があることは危惧している。APPP の授業は英語なのでなかなか他プログラム学生が受講しない。言葉の壁というよりは英語のレポートの書き方がわからない等の理由も考えられる。工夫次第で受講者が増え、交流が促進されるのではないか。

（青野先生）海外の大学では初年次にアカデミックライティングの授業がある。本学でも意識的にトレーニングすることが必要かもしれない。また他プログラムの講義を周知するだけでも効果があるかもしれない。

■まとめ

（山重先生）IPP は小さな大学院だが、小さいからこそできることが多くあることにあらためて気づくことができた。愛校心もその一つ。地の利を生かしながら対面の良さ、少人数教育の強みを大事にしていきたい。